

私が聞いてくればいいんでしょー！

普段なかなか話を聞く機会のない人に、聞きにくそうなことも含めてインタビュー。「わかったわよ、私が聞いてくればいいんでしょー！」と、今日も失礼を承知でドアをノックいたしました。



今回伺ったのは、

関谷 航太 さん

あさひや農場代表。日本一有名な有機農家、金子美登氏に師事。1998年就農し、高い技術力を持ちながら、2016年にキャリア18年の有機農業をやめ、慣行農業（農薬も使う一般的な農業）へ転換。現在は3haの農地で白菜を農協へ出荷する。トラクターより働く奥さんと、高3、中3、小6の3人の子供がいる。

一緒に話を聞いてくれた人 萩原 紀行 さんのらから農場代表。現在6名のスタッフと、55haの農地を高い技術力をもって駆使し、多品目の有機野菜を多岐にわたって販売する長野を代表する有機農家。関谷氏とは研修同期で、同じ佐久穂（旧八千穂村）で就農し、共に歩いてきた兄弟的存在。



同じ畑でも、一生遊べる、
挑戦する面白さがあるんじゃないか

● 農業やろう！

ゆい：まず関谷さんが農業始めようと思ったところから聞かせて。

萩原：3時間コースだな！

ゆい：えー！！でもそこから聞かないと有機農業から慣行農業への転換の話をうまく聞けない気がする。

関谷：農業を始めようと思ったのは、大学5年生の時だね。

ゆい：5年？医大だっけ？

関谷：いやいや（笑）、一年間海外実習行つたから。そのころ、農業なんて土地に縛られるような仕事は俺には無理、と思ってただけど、パプアニューギニアに8か月いて、熱帯雨林で初めて自分の畑を持つたら、農業って面白いと思つたね。農業っていうのは人を縛るものじゃなくて、同じ畑でも、一生遊べる、挑戦する面白さがあるんじゃないかと思つたわけ。ちようどその時、帰りの飛行機で隣に座つたパプアニューギニア人が、大阪弁がめつちやうまくてさ（笑）、「日本今たいへんやで」って。冷害で日本がタイ米を大量に輸入したとき、あつたじゃん。

ゆい：なつかしい！結構大騒ぎだったよね。

萩原：1993年だ。

関谷：協力隊で海外いつて農業教えたりしても、自分の国が下手を打てばタイ米を輸入する。俺は、その頃まだ自給率つて大事だと思つてから、日本の農業が大事なんじゃないかっていう正義感がうまれたことと、挑戦し続け

られる面白さだね。社会正義と自分の好きなことが一緒に：：ほら、大学生つて社会正義大事じゃん。燃えるじゃん。それで日本で農業やろうと思つたわけ。

● 研修に入る

関谷：でもいきなり就農つてのがピンと来なくて、ハケ岳中央農業実践大学校で働いた。農業の情報が入るかなと思つたけど、実際行つてみたら毎日白い服着て牛乳のパック詰めでさ。2年も経たないうちに「さつさと就農したいな」と。当時、「新規就農ガイドブック」っていうのがあつて、いろんなまちの主力産業が「白菜」とか「養鶏」とか書いて後継者募集してるけど、まだ一つの野菜を追求したいと思えるほどつり構えられてなくて、いろいろやりたいと思つたんだよね。大学で有機農業サークルに入っていたから、多品目有機栽培をやっている金子さんのことも知つて、結果、金子さんのところに研修に行つたんだよ。

萩原：そこで僕と関谷さんは出会つた。もう圧倒的に上だったよ、知識量が。農大出てるし。今日やった作業の意味とかがわからないからさ、毎晩寝床で「今日やったことつてどういふことなんですか」つて聞いてた。

● いざ、就農！！

関谷：俺も萩さんも小川町で就農するつていうことは考えてなかったんだよ。



毎晩寝床で「今日やったことつてどういふことなんですか」つて聞いてた。



まあ、世の中のみなさん
お馴染みのことなんだろうけど(笑)。



ゆい：えーなんで？

関谷：金子さんの周りはすでに完成されて、今さら入ってもただの後追いつていうか。でも、就農するのはどこがいいかとか考えてなくてね。一生住むところだからさ、焼酎と日本酒どっち飲もうかなとか、日本海のふりと太平洋のサンマとどっちがいいかなとか。ゆい：楽しそうな選び方だねー(笑)。

関谷：でも一応、織座農園(佐久穂町。有機農家草分け的存在)の窪川さんが基準にあつたかな。研修生交換で、俺も萩さんも研修中に窪川さんのところには行つてた。窪川さんは俺らと同じ新規就農者で、素敵な家も建てて、冬は加工品も出して。それに東京に配達してるっていうのもすごかったよね。現実的に見本だった。結局窪川さんに「近くで土地空いてるよ」って言われて、ここにしようって決めた。

萩原：僕はまだ迷ってたんだけど、関谷さんに「緒のところでやろうよ」って言われて、まあいいか、って。いま考えると、どの口で経営を語るだよ。新規就農者の若い子に「経営考えないとまずいよ」とか今は言うけどさ。関谷：俺なんか単純に、30000円の野菜セットが40件(毎週)に売れば月40万、あ、それでいいんだ、っていうくらい計算だった。ゆい：それは売上でしょ。恐ろしい話だね。

関谷：それで食っていけるんだらうな。俺さ、初めて奥さんの実家にご挨拶いったときに、その計算言つた気がする。「だから

大丈夫だ」って。もう恥ずかしい!!
一同：(爆笑)きつと見抜かれてたねー

● 人類の歴史をたどる人生?!

関谷：就農してしばらくして「お金つて必要なんだな」って思った。借りた家も本当にボロボロなんだけど、古民家風に直そうと思って気づくんだよね、お金と時間がかかるって。大工の義父が見かねてトラックで来て、壁を全部ベニアでバンツバンツバンツって貼っていくわけ。俺は漆喰とか塗リたかつたから「あー」って思ったんだけど、…快適になったよね。あれで一つ、人生観が変わつた。便利つてすばらしい。パプアニューギニアの時代はさ、電気、水道、ガス何もなく、焚火して食べる時代から始まって、それでも俺の中では文明が進んできていた。その後、その家が火事で全焼して、町のアパートに当面住まわせてもらった。そこはさ、窓も2重で家があたたかくて、蛇口ひねればお湯がでるんだよ。すごく感動した!

ゆい：あはは！文明を目の当たり!

関谷：世の中の人にはお馴染みなんだろうけど。移住の時、大家さんから直接空き家を借りると、壊れたところは「あ、僕直します」ってなる。不動産屋さんから借りると壊れたところは直してくれるし、家の中に大家さんの物もないし。まあ、世の中のみなさんお馴染みのことなんだろうけど(笑)。

● 農業の歴史もたどる

関谷：パプアニューギニアでは原始的な農をして、焼き畑では芋をあちこちに植えるんだよ。「点」での管理なんだよね。そこから日本では有機農業始めて、効率的な「線」で農業をするようになって、今はさらに大きな「面」で農業をやってる。

ゆい：あ、だどってる。

関谷：パプアニューギニアの人はなんでもできるんだよ。車もバラして直すわけ。ここで教わるのなんでもできる。日本は分業して能力別のことをするよね。能力も農業も、多品目だとしても専門性は低くなるでしょ。一人でなんでもやるところから、だんだんできる人に任せた方がいいな。って思うようになった。

萩原：この流れをたどっていった人って実はあまりいないんだよね。人類の進化をさ。パプアニューギニアで自然農みたいなことやつてた人が言う意味はやつぱり大きいと思う。関谷さんの言葉って重いよね。この人にはたどる能力がある。

関谷：どんなに話しても今の人にはお馴染みのことなんだとね(笑)。

● 有機農業から慣行農業への転換

ゆい：2015年にFacebookで宅配野菜をやめるって投稿を見てびっくりしたよ。

萩原：投稿は「宅配やめます」だったけど、関谷さんはあの時すでに有機農業をやめる

って決めてたんだよ。

ゆい：そつなの?!

関谷：有機やめるって決めたとき、その時点で宅配野菜はすぐにやめなきゃって思った。自分は有機をやめる準備してるのに「有機野菜おいしいですよ」って消費者に送れないからね。最後の年は、流通に有機野菜を出荷しながら転換の準備をしてた。その年が一番よかつたんだよね、所得が。

ゆい：え?!宅配やめた年が一番よかつたの? 関谷：うちは宅配数が減ってきてたから。少ないセット野菜を作ることのロスって大きい。やつぱり、通信(野菜と一緒に送るお客さん向けの便り)を書かないだけでも仕事少なくていいね。

萩原：有機農業っていうより、宅配型多品目有機農業は、やるのがすごく多いんだよね。お客さんから「畑の写真下さい」とかも意外と大変。僕は年に50本くらい文章を書くんだけど、それも得意な人ならいい。消費者に農業を知ってもらうという御旗の元にやることは多いよ。

ゆい：そう。膨大な仕事量、宅配はね。夫は今マクロ勉強してるんだけど、自分の事務仕事をどれだけマクロに組み込めるかってやってる。パソコン好きだから趣味なんだよね。だからできる。

● 慣行農業を選んだ理由

萩原：僕は奥さんの意向も大きかったと思うな。

「これは関谷さんの

何かの引き金を引くな」って思った。



結城さん（佐久穂町最大規模農家、新規就農者）の成功も大きかったよね。僕は関谷さんが有機やめる前、「何か変わるな」って感じてた。そんな中、一緒に組んでる流通出荷で、野菜と一緒に、カタログに載せるキャッチフレーズも出すんだけど、これが意外に大変で、その時夏で忙しかったんだよね。当番になった人が、肉厚ピーマンに『デカイ！ウマイ！』とだけ書いて出したの。俺それみて「これは関谷さんの何かの引き金を引くな」って思った。

関谷：たしかにあれば大きかったね（笑）。農家がブランド化して売ると言っても、結局そんなもんしか差つてないんだって思った。ゆい：以心伝心。すごい。

萩原：有機有機っていつてるけど、結局自分たちがやってることってその程度の差異しかないんじゃないか、他とは違うんだっていう理由付けを、無理くり考えるのにネタが尽きてきている自分たち有機農家がいなかったっていう問いだよ。

関谷：俺がやってることってそんなに貴重なのかなって。加工品でよく思うけど、俺の人参ジュースって特別なものじゃない。例えば、俺と坂巻さん（近所の有機農家仲間の人参ジュースって違いがないと思うんだよ。同じ品種で、同じ加工所で、同じ肥料で、農法も地域もさ。むしろ去年と今年の俺のジュースの差の方が絶対大きいんだよ。

萩原：確かに。天候とかあるからね。

関谷：そんな中で俺の俺のって言うていくのがブランドなんだよね。それは大事なことだと思う。でも、デカイ、ウマイもそうだけど、どんなに言ってもそれくらいの違いしかないだろうなって。

萩原：そのわずかな差異を浮きだたせるためにエネルギーをかけて、もどってくるものが少ないと、何をやっているのかと思ってしまう。それにかけてるエネルギーのかけがえのなさを感じたんだろうね。

関谷：それですごく収入を得てるならいいんだけどさ。そもそも大した量作ってるわけでもないじゃない。この小さい集落の中で競いたくなかった。坂巻さんにも提案したんだよ、一緒にジュースやらないかって。でもやっぱりみんな自分のジュースを作りたいんだよ。俺は自分の名前で売るのが苦手。うどんなにもラベルに農場の名前書いてない。だって材料一緒じゃん、とか思うからさ。できれば誰かとやりたい。

ゆい：一緒だって言っちゃうと、やってる人たちのアイデンティティが崩壊しちゃう。

関谷：そう。それが楽なのが農協出荷なんだよね。

ゆい：そもそも農協はみんなと一緒に農業する仕組みだもんね。

萩原：自分の名前で売らないということだけなら、宅配やめてもJAS有機認証で流通出荷して、有機農業にとどまるっていう手もあったんだけど関谷さんはそこを飛び越え

たよね。

関谷：宅配なら、有機認証なくても、関谷さんの野菜がほいって言われてたものがさ、JAS有機で流通出荷すると、わざわざ自分の野菜ってことを証明するのに手間かけてシール貼らないと信用してもらえないでしょ。しかもそれを売るために「写真下さい」とか「キャッチフレーズ書いてください」とか言われるでしょ。

ゆい：結局それはやらないといけないのか。有機農業そのものに強く価値を感じなければJAS有機の必要はないよね。

関谷：俺の場合は、有機農業やるなら、欲しいっていう消費者がいないとダメ。それを食べたいって言う人がいるから作れるけど、出荷先が流通だけになるなら、農協でもいいかなって。

● 自分の仕事を一から作るか、仕事は仕事で割り切るか

関谷：有機農業って一から世界を作っていくような仕事だと思う。農協出荷も自分の世界は作るんだけど、有機農業やると出荷システムとか経理とか一から全部作る。世界を作って初めて農業経営（仕事）が成り立つわけ。農協なら手数料10%払えばいい。野菜を作ることにだけに集中できる。仕事終わったら趣味の時間。農閑期には旅行にも行く。

ゆい：ひざから崩れ落ちるわ。

萩原：費用対効果求めちゃダメだね。

関谷：いや、そこは求めている、求めないと

いけないと思うんだよ。二人はそれに見合う売上がある。売上が伴ってないと本当に疲れただけで終わっちゃうんだよ。

ゆい：確かに。うちは夫が自分のベースで仕事したい人で、しかも、システムつくることを趣味に走ってるからやってるけど、これで本当に苦悩したら方向転換考えるわ。

萩原：関谷さんが言ってたけど、僕みたいな、一生、それこそ起きている時間だけじゃなくて寝てる時間も仕事のことを考えてる人は創業者、世界を一から作る人なんだって。だから今は有機農業に向いてる。逆に、趣味のトップが「農業」じゃないとできない。逆を言えば、仕事と趣味を割り切る人は農協出荷に向いているかもしれないね。

● とはいえ、農業を使うという点

ゆい：転換するとき、農業や化成肥料を使うことについてはどう思ってた？

関谷：農協出荷の話の前に、流通に出荷する（宅配ではない）有機農業のことから話すと、そこではJAS有機認証で認められている農業は使われているよね。流通だけで経営していくのならば、基本的にはBT剤（パチルス菌由来の殺虫剤。JAS有機認証の農業）とかはみんな使ったよね。使わないと単純に損するだけなんだよ。今まで使わなかったのは、少量多品目栽培で使うことがそもそも難しい（きゅうり用の農薬が隣の大根にかかってしまうなど、小さな多品目



そもそも農協は

みんなと一緒に農業する仕組みだもんね。

俺にとっては有機認証されているB-T剤も、普通の農薬もそんなに変わらんないんだよね。使うか使わないかの話だから。



化学肥料と有機肥料を使つて、評価基準(安定供給、コスト安)が同じなら、有機というこだわり(縛り)がなくなるだけ。

栽培で物理的に困難が多い(ことと、消費者への説明コストも高い。せっかく消費者に直接販売しているのに、認証されていても「農薬」という疑わしいものを使うことが商売上むずかしいから使つてなかった。それと、やっぱり使つたら負けつて思つてた。師匠の金子さんも萩さんも、由井さんのところだつて使つてないわけでしょ。先人や仲間も使つてない。そこで、大丈夫だから、認証されてるからつて「農薬を」撒くこと自体が、これは感情論でね、安全性がどこのこののじゃなくて、負けだと思つてた。はずかしいつて。それが直販をやめて流通一本となると、かなりドライな世界なんだよ。たとえばらでいっしゅばーやにプロツコリーを出してたとき、虫の混入が多いから栽培や出荷に関するアンケートが来たのね。結果が返つてきたら、うちだけだつた、農薬撒いてないの。ほかのところはB-T剤とか使つてるんだよね。それはぜんぜん悪いことじゃなくて、有機の基準にもらでいっしゅばーやの基準にも合つてるし。その中でB-T剤も使わずに栽培しても価格も変わらないし、らでいっしゅばーやのお客さんからしてもあまり変わらないんだよね。流通全般からみても、無理して無農薬で作るなら、最低限の農薬は使つて、なるべく虫がつかない、葉が食われないものを求められる。使えるものは使いなさいつていうのが流通での考え方なんだよね。宅配をやつていれば、消費者との「無農薬」という約束があつた

けど、流通一本に絞るとしたらそこはドライに考えなくちゃいけないから、使うものは使つたほうがいいんだと。そこで、農薬を使うとなると、俺にとっては有機認証されているB-T剤も、普通の農薬もそんなに変わらんないんだよね。使うか使わないかの話だから。

●有機認証と安全は関係ない?!

JAS有機で認証されてる農薬と、一般農薬の違いでなかった。使つたらみんな一緒。一緒じゃないんだろうけど、JAS有機で使つていい農薬と、使つちやいけない農薬の安全性に関する合理的な理由つてないんだよね。要は自然界から抽出したかどうかくらいのことなわけ。安全性じゃなくて、自然界からとったからどうか。そういうJAS有機に関する疑問点はある。JAS有機が悪いつてことじゃなくて、たとえば硫酸マグネシウムに関しても、海水から抽出もできるんだけど、それは化学合成をするつて理由でJAS有機ではダメ。でも中国の山から削つて持つてくるのは有機でいいんだよ。

ゆい：あつはつは。

関谷：そういう観点でみると基準つてあいまいだと思つたし、流通だけの有機農業つて、農薬だけの話じゃないんだけど、あまり心ときめかなかつた。俺は、有機野菜が並んでるお高いスーパーに来るお客さんよりは、世間一般のみなさんに白菜食べてもらいたいって思つたしね。結局、B-T剤とか使う

なら、そんな中途半端なことしないでやりたかつた。自分が今まで農薬を使わなかつたのはほとんど意地みたいなものだったんだよね。安全性がどうかじゃなくて。今は有機農家ですら農薬は安全だつて言つてる。使わない理由つてのは、経営的に売りやすいかどうかと意地しかなかった。農薬使うなら有機も慣行も俺にとつて違いはないし、消費者に対する説明は、JAS有機なら認証コストと事務コストを払つて買つてイメージで、農協なら特にない。直接お客さんに野菜を売る以外は、有機でやる意味が、農薬を使わない意味がないんだよね。化学肥料が好きとか有機肥料が好きとかじゃなくて、こだわりの世界を取り払っちゃえば、ここから先はビジネスの世界。栽培の選択肢が増えるわけだから、その中でベストなものを選んで使つていうこと。その選択肢に化学肥料も入つてくる、つてことだよ。

化学肥料と有機肥料を使つて、評価基準(安定供給、コスト安)が同じなら、有機というこだわり(縛り)がなくなるだけ。

ゆい：有機ではない。化学肥料と化学農薬を使つた栽培になるわけじゃない。有機という縛りを越えたことで、選択肢が増えて、その中でベストを選んでいくつてことだよ。関谷：そう。俺にとっては、今までフランス料理の看板掲げてたシェフが「今日からフランス料理じゃないですよ」つていうくらいに感覚なんだよね。フランス料理の専門店

だつたけど、これからはなんでもやりやすよつていう。フランス料理に対するこだわりがあつたからフランス料理だけを作つていたわけだけど、それに限らないおいしいものをこれからも届けますつてことでしょう。安全性に関しても、自分の中で、有機の科学的、社会的な正当性に関して無理があつたのかなと思う。あれも危険だこれも危険だつていう、どうしてもオカルト的な情報も入つてくる。そういうものを纏いながら農業をやつていくのが嫌なんだよね。最近でいえばF1の種の野菜を食べると子種がなくなっちゃうとかさ、そういうのが混ざつてくる世界にいたくないんだよね。

ゆい：非科学的な、というか無知つていうか。関谷：オカルト的な情報が混ざつちやつてるせいで、せっかくの有機農業の正しい情報が汚れちやつてる部分を感じるんだよね。どうしてもオカルト的なものを信じて、期待してるお客さんもいるわけ。そういう人に「いや、そうではないんですよ」つて言い続けるのも大変だし、そうやつておかしい情報を正しつて逆に有機の世界で生き残りにくくなつてくるんだよね。

ゆい：そこはあいまいにしておいた方がいいんだよね。わかる。

関谷：そうなんだよね。でも俺はあいまいにできないんだよね。インターネットで見ても例えばモンサントの遺伝子組み換えはよくないつて書いてる人のHPと、モンサントは



悪くないって人のHPを見比べちゃうと、モンサントを悪く書いているHPの方があやしいっていうか、アフエリエイト（広告）がいっぱい入って、クリックさせるために作ってあったりして、俺は生理的に受け入れられないだよな。

ゆい：お隣の国を叩いてるサイトとかに近いね。

関谷：右でも左でもないんだけど、あれもこれも否定してる。しかもそのサイト自体は商売（広告収入）目的なんだよね。いろんな否定の総合サイトみたいになって、F1も除草剤もおかしいって言って、そうやって儲かっているようなサイトが多いんだよ、実際。そういうサイトってちよっと品がなくて、遺伝子組み換えに関する写真もおどろおどろしいんだよな。しかもそこに載ってる鹿の皮膚病の写真は、遺伝子組み換えが原因じゃなくて、ただの鹿の皮膚病だったりする。

ゆい：詐欺、ぎりぎり。

関谷：一方、モンサントとかの農薬会社の言っていることがまったく正しいとは言わないけど、少なくともそんな変な写真とか載せちゃったらずいからそこまでのことはしないんだよな。社会的な信用。世の中を全部信用しているわけじゃないけど、それでも信用しないと成り立たないだろ、この世界って思う。ある程度のところは信用して、たまに信用してたけどこまかされてたっていう話は出てくるじゃない。でも、だからって

その会社が全部だめだったことじゃなくて、そういうこともあるだろうねっていう程度で、やっぱりこの社会に農薬があつて化学肥料があつて遺伝子組み換えもあつて、それなりの人間が無事に生きているこの世の中を信用している。その世界でいいかな、と思ってる。

ひよっとしたら遺伝子組み換えの何かがあぶないとか、おそろくそういうこともあるんだろうけど、そこにこだわったところで自分の生活は変わらないわけじゃん、たぶん。そんなに言うなら本当に生き方変えなくちゃいけないよっていう人たちがさ、危険危険っていいながら普通に暮らしてるわけじゃん。政府がひた隠しにしていることがどうのこうのって、そこまで世の中を信用しないのによく普段生きていけますねって思うんだよな。そんな風に世の中を信用しないよりは、ある程度信用しているから転換できたってことだろうね。農薬だって使い方によっては危険なんだろうけど、普通に生きていく分には問題ないと思ってるし、もちろん有機はあつていいと思ってるしね。ただ、世界中を、日本中を有機にするとすると、それは大変なことになるよって思う。

ゆい：それは確かにそうだよな。

関谷：こだわりの世界よりも、こだわっていない世界の方が自分に合ってるかな、っていうくらいだよ。二つの農薬の危険性とかはわからないし、信用して使っしかないしね。

● 農業の入口が有機農業だった

ゆい：極端なことを言うけど、有機をやってきたのは入り口が有機農家の金子さんだったから？

関谷：そうだね。金子さんは大きいよね。それと日本有機農業研究会にも入ったし、この長野県有機農業研究会もあつて、そういう先人の道があつたからだよね。

ゆい：そこから入って一人前になった。

関谷：そこで教わったことや過去にやってきたことに関しては感謝こそあれ、否定する気持ちはもちろんない。だまされたとか笑。その当時の自分が考える農業の入り口はそうであつただけで、知らなかったし、そんなに深く考えてなかったんだろうね。

ゆい：それはみんなそうだと思う。この前、自然栽培やっている人に話聞いた時も、「農業始める前に、本当に何も知らなくてとりあえず行つた勉強会が自然栽培だったんだよ」って話してて。私だって有機農家に行くことを選んだときは何も知らないOLだった。関谷さんの場合は農大の頃から有機農業サークルに入ってたから早い段階で触れていたよね。

関谷：慣行への転換に関して言えば、自分が慣行農家との付き合いが長いっていうのもあるよね、この町で有機農家と慣行農家をつなげてきたし。有機農家と慣行農家の新規就農者の飲み会とかをやってきて、有機と

慣行を仲良くさせてきたからそういうのも転換の理由にはあるかもね。有機と慣行の新規就農者が別々の道を進むっていうことは町に住む農家としては不安だったんだよな。知らないもの同士で、あつちから農薬が飛んでくるとか、あつちから虫が飛んでくるとかかって話になつても嫌だから。

ゆい：有機と慣行の若者をつなげるとは、いい仕事したねー。

関谷：でもさみしいのは、後釜がない感じで、やっぱりほとくと分かれていくよね。

ゆい：接点ないもんね。

関谷：そうなんだよ！有機と慣行の接点があまりにもない。同じ町で農業やるものとして、技術的なことにしても、もっと接点があつていいと思うね。

ゆい：これからきつと増えていくよ。関谷さんがまた何をするのが楽しみだわあ、目が離せないですー！